【研修報告】

異なる立場の人との交流で学びが深まる

―福井大学ラウンドテーブル2017研修報告―

猶　原　和　子*

海老原由香（3年）・関　優颯（3年）・高橋康介（3年）・高橋麻子（3年）

1. はじめに

2001年に産声をあげた「福井ラウンドテーブル」は，2017年２月には第32回目を迎え，海外からの参加者も含め900名を超える大きな会となった。「実践し省察するコミュニティ」というタイトルにあるように，福井大学の教職大学院が実践の長い歩みとプロセスをじっくり聴き合い問い深める会として発足したものである。現在では静岡大学や明治大学，大阪教育大学，宇都宮大学，長崎大学など多くの大学でラウンドテーブルが開催され，「共有された理念とビジョンに基づく省察的機構としての分散型実践コミュニティ」が生まれている。

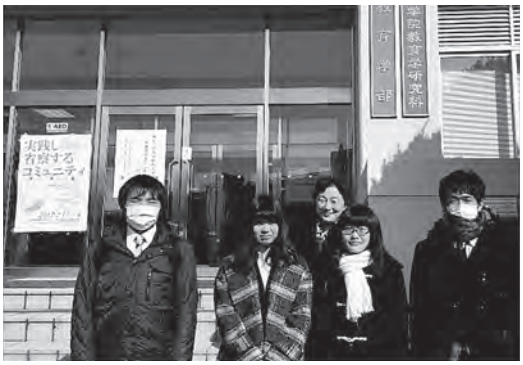
筆者は2009年に訪れて以来，４度目の参加となった。今回は，「学校」「教師」「コミュニティ」「授業」という４つのZoneの中の「学校」の中で，学部段階の教育と学生同士のセッションを企画したということで，福井大学の濱口由美先生に機会を与えていただき，2017年２月17,18日に４名の学生とともに参加した。

学生の４名は，以下の２つに参加した。

・保幼小教育フォーラム
「子どもの世界を広げ，つなぐために」

・学部学生のクロスセッション
授業／活動―語ろう・聴こう・出会い直そう―

筆者は，上記の２つに加え，翌日の「ラウンドテーブル　クロスセッション　実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る」にも参加した。



４名の学生とともに（当時は２年生）

学部学生のクロスセッションには，福井大学のほかに静岡大学や中部大学などから100名の参加があった。前半は，教師と学生がそれぞれ分かれ，他大学の方と小グループで「夢を語り合おう」，後半は大学教師も学生グループに入り，若者の語りを聴きあうという形で進んだ。始まる前は緊張気味で，慣れない雰囲気に戸惑い不安な様子だった４名だが，終了後は「いい経験だった，時間がもっと欲しかった」「他大学の先生方と話せたことがよかった」と，いきいきとした表情で語っていた。また，会場の隣ではポスターセッションも行われ，全国からたくさんの学校や施設，大学が参加しており，これもいい刺激となったようである。

このラウンドテーブルは，地域や職種，年齢の異なる様々な実践者や研究者が集い，互いの実

*江戸川大学こどもコミュニケーション学科 准教授

践から省察的に学び合う場である。ドナルド・ショーンは，研究者と実践者の協働を軸にそれを支える組織学習と機構のありかたを提起したが，まさにこの理論をもとにして始まったものである。

異なる立場の人々が集い聴き合う中で，それぞれが新たな発見をする。このような経験を通して，「正解」や「単線的解決」を求めるのでなく，地道な実践と省察を協働的・持続的に展開すること，そして，より良い方向を求めて新たな実践を行おうとする力が育つことが大切だと考える。それは今，大学教員にこそ強く求められているのではないだろうか。

以下は今回の参加者５名が，それぞれに感想をまとめたものである。語り口の違いも味わってお読みいただければ幸いである。

（猶原和子）

2. 他地域の教育に触れて

海老原由香

(1) 保幼小フォーラム「子どもの世界を広げ，つなぐために」

このセッションでは，保育園・幼稚園・小学校それぞれの先生方から話を聞いた。

【先生方の話】

①　社会福祉法人華光会二葉保育園

泰圓澄一法先生が話された。こちらの園では，この園で育ち，地域で生き，子どもや孫が再び同じ園に通うという家庭もあり，保護者会の活動が盛んに行われているそうである。特に大事にしているのは，子どもとの信頼関係・食育（給食室での調理の様子を見る，魚屋さんを訪ねる，野菜を育てる，料理をする）・園内研究・園内だよりということだった。

①　滋賀県豊郷町立豊郷幼稚園

沢智子先生のお話を伺った。こちらの園は，滋賀県内で最も小さい町にある唯一の幼稚園で，だからこそ，保育・小・中の先生が一堂に介することができるとおっしゃっていた。また，園内研究の充実を目指しており，福井大学の先生に来てもらい，年間のカリキュラムを作成しているそうである。まず，客観的に見ることで自分の保育を見直す・園内研究の日で終わりにするのではなく，次に生かしていく等，教師の質も向上していくことが目標とのことだった。

③　福井県福井市立西藤島小学校

西方善江先生の発表だった。1年生のスタートは「待つ」ことだという。年長さんの力をそのまま生かせるように，たくさん褒めて，もっている経験や力を「引き出す」のだそうだ。また，他の講習会で聞いたことをすぐに実践（あさがおを育てる際に，子どもたち自身の話し合いで種の数・植える場所を自由にする）したそうである。

【お話を聞いて】

幼稚園・保育園・小学校の先生方の話を聞いて，連携が大事なのだと思った。それぞれが子どものことを考えるだけでなく，子どもは幼稚園や保育園での生活を経て小学校に入る。西方先生がお話なさったように，『未熟なものとして新一年生を受け入れるのではなく，できる子として受け入れる視点』が必要である，ということの大切さを感じた。適応指導をするだけでなく，もっている経験や力を引き出すというのは小学校だけでなく，保育現場においても同じことが言えるのだと思った。

(2) ポスターセッション

【気になった発表】

①　滋賀県愛荘町立奏荘幼稚園

子どもが主体的になって遊ぶ事例として，5歳児の発表会ごっこでは，親に認められた自信から子どもがこどもに教える姿が見られたそうである。

また，同じ5歳児のレストラン屋さんごっこでは，最初に他のクラスのこどもをお客さんとして招待したが，終わったあとグチャグチャになってしまった。どうすればよいだろうかと投げかけると，「片付ける」「お客さんに並んでもらう」という意見が出て，翌日は，子どもたちが役割を決め実践したという。

また，3歳児の色水遊びでは，4・5歳児への憧れから遊ぶ姿が見られたそうである。

「保育は一本線ではなく，螺旋状に繰り返しいくものである。まず『やってみたい』とい気持

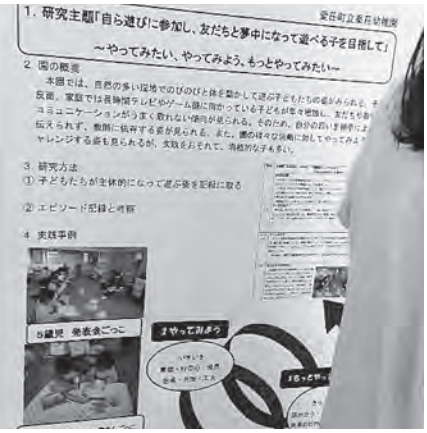


写真１　滋賀県愛荘町立奏荘幼稚園 ポスター

ちが『やってみよう』なり，『もっとやってみたい』につながっていく」という言葉が印象的だった。

②　さくら認定こども園

以前は，マーチングの練習を９時半から12時まで毎日行い，運動会は朝から晩まで練習し，制作が苦手な子どもには保育者が作品に手を加えるといったことを行い，保育室の安全な環境にするためには何もない保育室がよいのだろうと思っていたそうだ。

保育方法を変えなくてはならないと思ったきっかけは，他の園を見学したことだったと言う。そこでアクティブラーニングの大切さを感じ，子どもの声を聴くようになったとのことであった。

具体的な施策として，４・５歳児を縦割クラスにする。ホワイトボードを使い，今日はどこで遊んでよいかを確認できるようにする。Ｂブロック・いがたブロックをカプラ（同じ大きさのもの）に変える。園庭は箱庭のようなイメージで作り変える等を行った。

また，紙ヒコーキを折りたいという子どもの声にこたえた際，大きい方が飛ぶ・小さい方が飛ぶ・先を曲げた方が…・走って投げたら…という子どもの気づきに寄り添った。他にも保護者からの意見を園だよりの中で知らせる・週に1･2回写真を撮ってポートフォリオを作成し，これからの課題に向き合っていくとのことであった。

【ポスターセッションに参加して】

ポスターセッションのコーナーでは，様々な団体が，ポスターを効果的に見てもらえるようにとそれぞれに工夫されていた。その中で私が感じたのは，文字ばかりではなく写真や色を使った方がより見やすいということである。また漠然と情報を詰め込むだけでは見づらいために，取捨選択をすることが大事なのだと感じた。

また，園によって保育に対する考え方は全く違うのだということも実感した。特に驚いたのは，さくら認定こども園での以前の考え方である。子どもの個性を大切にしている保育園が多い中でこんな考え方もあったのだと，衝撃を受けた。今では子どもの声に耳を傾けた保育を行っているということで，私も保育に対するアンテナを高く持って，当たり前だと思っていることも多面的に判断していくことが大切だと感じた。

(3) 学部学生のクロスセッション

このゾーンでは，福井大学生を中心に，江戸川大学生を含めた他大学生で5～6人のグループを作り，自分の夢や今取り組んでいることについて話しあった。私のグループの学生は，福井大学教育学部生，福井大学工学部生２人，福井大学教育地域科学部生だった。

私にとって他大学の学生とセッションをするというのは初めての経験であり，また工学部のことについてはほとんど知識がなかったので今回，他学部についても知ることができてよかっ

写真２ 「探究ネットワーク」の発表

た。保育園や幼稚園と同じように，大学もそれぞれに色々な活動があるのだと感じた。

特に印象に残ったのは，教育学部の探究ネットワークという活動である。この活動は小学校高学年を対象に大学生が9つのブロックに分かれて活動するというものであった。

私のグループでこの活動に参加していた学生は，探究ネットワークの中の「ふれあいフレンドクラブ」で活動をしていた。「ふれあいフレンドクラブ」では特別支援学級に通っている小学生から高校生の子どもたちとパートナーになり活動していく。大学１年次は子どもたちとパートナーになり一緒に活動し，２年次は活動の企画をするなど運営を行う。学生はこの活動を通して様々なことを学べたと言っていた。

(4) 最後に

福井大学でのラウンドテーブルを通して，様々なことを学ぶことができた。自分が慣れ親しんだ地域ではなく，他地域の教育を感じることができ，その地域に合った教育をそれぞれが日々試行錯誤しながら行っているのだと思った。

今回学んだことを，これからの生活に生かしていきたいと思っている。

3. 連携することで，学びが深まる

関　優颯

福井大学で行われたラウンドテーブルでは保幼小連携の発表で園長先生の方々の話を聞くことができた。また，自分の気になった教育について書かれているポスターの発表を聞くことができたり，福井大学の学生たちと将来の夢や目標について話し合ったりと，貴重な体験をし，充実した一日を過ごすことができた。

(1) 保幼小連携の発表

①　豊郷幼稚園の特色

豊郷幼稚園では「心豊かでたくましい幼児の育成」を目指して望ましい人間性と生きる力の基礎を培うというのを教育目標とし，幼児理解を深め，保育の質を高めるために「心揺さぶられる体験を通して子どもの主体性を育む」を園内の研究テーマに設定し，年間のカリキュラムを作成している。

教育目標と研究テーマを達成していくための園の方針には，納得することがたくさんあった。例えば，異年齢で人数を均等にわけてクラスを作ることや，担当の先生を前半後半で分け実践を行い，事例をまとめ客観的に見直すなどは，自分では考えてもみないことだった。子どもだけでなく，教員も主体的に取り組むようになり，連携がとりやすい環境になったというのが印象に残った。

②　二葉保育園の特色

二葉保育園の発表では，元気な子・優しい子・心豊かな子・たくましい子を保育目標とし，「心・遊・食・輪」の四つを目標にし，達成するために重視し指導計画を立てている。

印象に残ったことは，地域との連携を大切にするため，月に二回保護者会を開き情報の共有し，食育を学ぶときには保護者も参加できるようにして連携を深め，子どもと保護者を大切にしているところに感銘を受けた。

③　西藤島小学校の特色

西藤島小学校では，子どもたちが新しい環境への喜びと不安に慣れるために，たくさん褒め，笑い，課題にぶつかったときも，児童の様子をみて，自分でやれるようになれるまで「待つ」ということを大切にしている。先生たちが連携し配慮しているところがあり，その点がとても印象に残った。この小学校の先生方は一貫して失敗するまで待つという方針だという。失敗をすることを前もって予想しておくことで，先生側も慌てることなく教育をしていくことができる。その理由は，成功経験だけでは，気づきが少なく，一緒に考えることができないということであった。この考えにとても共感した。

(2) ポスターセッション

①　さくら認定こども園

この園では，支援センターや大学院の方々との出会いをきっかけに４７年間にもわたる一斉保育を見直した。他園訪問もして現状の把握，課題の確認を行い，どういうことをするか具体的な施策の案をだし，改革を始めたという。そ

れでも今後の課題が山積みで，試行錯誤しながら，笑顔のたえない子どもに育ってほしいということを念頭に保育しているとのことだった。

写真３　さくら認定こども園のポスター

上の画像は，さくら認定こども園のポスターで，試行錯誤した課程が記されている。この発表を聞き，他園を訪問して連携をとりあい，発想の違いを知り，よりよい園での生活を作り上げていくという姿がとても印象に残った。

長年続いた園の方針を変えるのはとても大変だと思うが，これからもっとより良い園になっていくのが目にみえるようであった。

②　大学院生版PISAでの学び

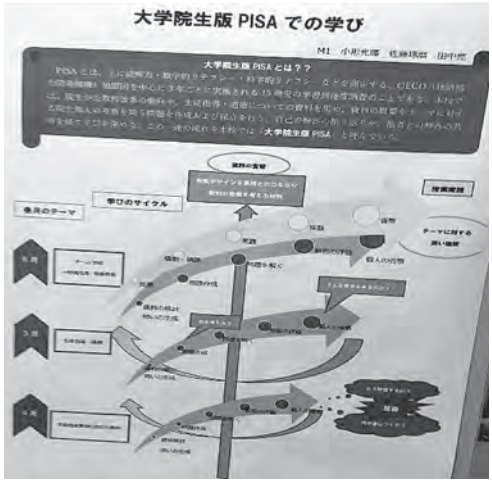


写真４　大学院生PISAの学びのサイクル

PISAとは15歳児の学習到達度調査のことだが，これの大学院生版だという。院生が教育改革の動向や生徒指導についての資料を集め，概要やテーマに対する個人の考察を問う問題を作成し，採点を行う。自己の解答の振り返りや，達者との解答の共有を経て学びを深めるという一連の流れを「大学院生版PISA」と呼んでいるそうである。この発表の中では，自分が問題を作り解いていると，出題者がどういうことをわかってほしくて問題を作成するかがわかると言っていた。改めて相手の立場に立って考えるということを考えた。

(3) ラウンドテーブル

【私自身の発表】

夢や目標について話し合うラウンドテーブルの中で，私は今自分が考えていることを語った。一つ目は資格を得るためにきちんと大学を卒業すること，公務員資格の試験に合格することである。これは将来の安定性を求めて取っておきたい資格だと考えている。

さらに，保育士の給料をあげるべきだと思っていることと，女性が一時的に退職したときに現場に復帰することが難しいことを改善したいと思っていることを発表した。保育士の数を増やすためにも重要なことだと考えているからである。

【他大学の人の意見で印象に残ったこと】

他大学の人たちは自分の意見に賛同してくれるだけでなく，保育士の少ない理由を他にも挙げて，より深く対処法を考えていた。

意見をもらった中で，「園に体験に行った方の発表を聞くと，担当の先生の行動をすべて正しいと思って行動していると，他の先生と言っていることが違うことが多くある。先生の言われたとおりにばかりに行動するのではなく，本当にそれでいいのかと疑問をもち，自分で考えてから行動するようにすること。実習生と先生の間にも連携が必要だ」という発表は特に強烈だった。考えて行動するのは当たり前のことだが，私自身は先生に言われたとおりに行動しがちである。状況にあった正しい行動を考えることが必要であるし，コミュニケーションをたくさんとることが大切なのだと思った。

(4) 参加した感想

今回の体験の中では，「連携」という言葉が特に印象に残った。保育園，幼稚園，小学校から大学までの「教育の連携」もあるし，今回のように，立場の異なる人たちが数多く集い，「連携し，聞きあう」からこそ，よりよい経験ができたのだと思う。

発表のときは，最初は不安でいっぱいだったが，自分の発表が終わり，周りの人から質問されるうちに，自分の考えを改めて考えるようになった。その中で，自分が考えていることがまだまだ浅はかだったことに気づかされた。

また，ほかの人の発表を聞いていると，自分の思ってもみなかったことがあり，それについて自分なりに考えてみたり，感じたことを発言しているうちに楽しくなっていった。このような貴重な体験をできたことを，非常に嬉しく思っている。

4. 自分の活動を改めて振り返る機会

高橋康介

(1) ポスターセッション

ポスターセッションでは，公民館や大学，大学院や特別支援学級など，様々な場所で，多様な活動をそれぞれ行っていることがわかった。特に，自分自身が公民館の活動について発表することにしていたので，今回，福井の公民館の様々な活動が発表されていて興味を持った。

幾つもの発表をみて気づいたのは，季節の行事はどこの公民館でも同じように行っているが，公民館クラブや放課後子ども教室など，家庭支援の方法が様々だということである。

写真５　福井市一乗公民館のポスター

写真６　福井市　清水東公民館のポスター

また，福井大学の「探求ネットワーク」という発表の中で，「もぐもぐブロックの活動」が面白いと思った。

探求ネットワークとは福井大学教育学部の学生がスタッフとなり，地域のこどもと共同で探究を行う活動のことだ。今年度のもぐもぐブロックでは，「もぐもぐ大陸～cook the world～」をテーマとして，世界の料理を学ぶとともに，その国について知識を深めたそうである。

その中でも，特に印象的だったのは，春サイクルで行った，アジアの料理を作りお客様に披露するという体験活動である。子どもが作る料理を調べ，実際に作り，活動の振り返りとして発表するサイクルが自然に行っていることや，披露することで，そのグループ内以外にも人間関係を広げることが出来ているところがいいなと思った。

(2) クロスセッション

【自分の発表】

私は高校二年から参加している「どようび広場」について発表することにした。参加のきっかけは母親からの勧めで，何気なく参加していた活動だったが，保育士を目指し，大学での学びの中で，この「どようび広場」の活動は子どもの支援にも大人の支援にも繋がる活動だと思ったからである。

「どようび広場」というのは，平成14年からの完全学校五日制実施を目前に，子育てに不安を覚えた公民館利用者が，「子どもの居場所作り」について提案し，始まったものである。「どようび広場」の名の通り，毎月第三土曜日に，小学校や公民館での活動を行っている。企画，運営

はひろば支援隊（ボランティアスタッフ）を募集し，月に一度の定例会を開催し，活動を決めている。

活動内容は草団子作りや，田んぼで焼き芋といった自然とのかかわりを目的としたものや，家族サイエンスマジックやカレーorハヤシライス作りなど家族やひろば支援隊との人との関わりを目的としたものなど様々だ。

写真７　自分の発表より「大島公民館　餅つき」

私の発表では，上記で挙げた「どようび広場」で行った活動の紹介と，活動から浮かんだ「地域と繋がるとはどういうことなのか」と言う疑問を，参加した人に聞いてみることにした。そして，「活動を通してお互いを知り，自分の居場所や仲間を作ること」について，より深く考察できればと考えた。

残念ながら，私の発表順が最後だったため意見を交わす時間をとれずに閉会を迎えてしまった。だが，見ず知らずの人へ自分の意見や経験を伝えられるようにまとめることは，自分を見つめ直すいい機会だったと考えている。

【他の発表を受けて】

福井大学の丸山さんの「探求ネットワークの活動を通して」というレポートが印象に残った。紙漉き活動を中心に，春夏冬四つのサイクルで活動し，年間のテーマとして「つながれ！ひろがれ！かみすきのわ」を掲げていた。その中で，春サイクルで行ったかるた作りでは，かるたの絵を描く欄が長方形だったせいで，子どもたちの作るかるたが長方形ばかりになったそうだ。ファシリテーターは子どもの自由な発想をさまたげないよう気を付けなければならないなど，実際の活動の振り返りから改善点を見つけていた。

このような発表を聴き，子どもたちとの関わり方だけでなく，主役が子どもたちであることを忘れず，どこまでを支援するかを改めて考えねばならないと思った。今後に生かしていきたい。

5.　語り合う中で自分を発見する

高橋麻子

(1) ポスターセッション

数多いポスターの中でも，公民館のポスターが特に多く，福井県は公民館における地域交流が盛んだと思った。地域の方々と交流を持つ機会を設けることで，子どもたちが安心して屋外で遊ぶことができ，地域に愛着と誇りが持てるように感じた。

その中でも，私は，花筐公民館の「放課後子ども教室・花筐っ子ひろば」の活動が印象に残った。

写真８　花筐公民館のポスター

ミステリーバスツアーや，ピタゴラスイッチ大作戦など，普段なかなか体験できないことを体験することで子どもたちの思い出に残り，地域の方々との絆が深まる良い機会だなと思った。私自身は，普段，住んでいる地域の公民館を訪れたことがなく，場所も知らない。また，公民館がどんな活動をしているのかも知らなかったので，これからは，公民館にもう少し興味を持ってみようと思った。

次に印象に残ったのは，さくら認定こども園の

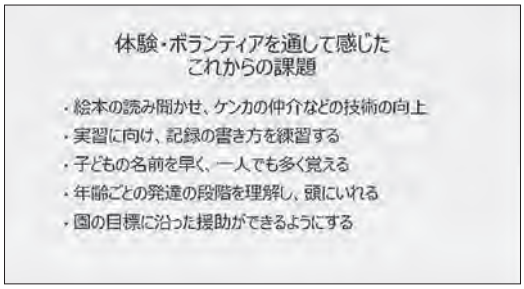
ポスターだ。創立されてから47年間ずっと一斉保育を行っていた園が，このままではいけないということに気付き，現代の保育体制に合った保育をしていくように変わっていったことがとても印象的だった。保育士を目指している身としては，このように変わっていくことはとても嬉しいことであり，今までの保育体制が間違っていたことに気付いたことがすごく大きな一歩だと思った。自分たちが間違っていることに気付くことはとても難しいことだと思うので，さくら認定こども園はすごいと感じた。

(2) クロスセッション

【自分の発表】

私は，1年生から子どもたちと実際に触れ合う機会が多いところが江戸川大学こども学科の一番の特徴だと思ったので，このことについて発表した。

すると，福井大学の学生から「1年生の頃から現場を経験できる機会が設けられているのは珍しいし，うらやましい」という感想をもらった。また，高校3年生からは，「授業以外でイベントに参加しているが，人見知りをしている子どもにどう関わっていけばいいか分からない」という相談を受けた。



自分の発表パワーポイントより

そこで初めて，他大学の方より多く現場を体験していることで，たくさん対応例を挙げることができ，また経験を積んでいる分，アドバイスにも説得力が出ることに自分で驚いた。

【学生・教師合同のセッション】

学生同士のセッションのあとには，各グループに様々な大学の先生が混ざり，再び振り返りのセッションを行った。

その時に，私たちのテーブルに来てくださった教授が，学生に“将来どうなりたいか”“大学生になって自分の中でなにか変化はあったか”“その変化にはなにが一番大きく関わってきているか”など，学校で学んでいること，保育士を目指している自分だけでなく，大学生として等身大の自分を見つめなおすことができるような質問をしてくださった。

その結果，私は，1年生の頃，授業で感じた“子育てに奮闘するお母さんたちの力になりたい”という気持ちを思い出すことができた。

加わった先生が，学生の気持ちを引き出すのが上手で，自分の現在の状況だけでなく，もう少し遠い夢や本当にやりたいことをそれぞれが語り始めた（自営で「カフェ」やりたい）……）。「あなたは，こういう考えを持っているんだね」と言ってくださることで，そういう自分に気づくことができた。

さらに私たちのグループは，高校3年生から大学3年生まで幅広い学年で構成されており，学んでいることも，東京の音楽大学に推薦で進学するという高校生もいれば，教育学部，工学部など様々だったため，考え方や着眼点などが異なっており，「こんな考え方もあるのか」と思うことも多く，大変勉強になった。

(3) 最後に

最初は上手に発表できるか，きちんと発言できるかと不安だらけだったが，いざ始まってみると，とてもリラックスした環境で，楽しくセッションを行うことができた。他大学の授業内容を聞いたり，自分の中に眠っていた考え方や目指しているものを知ることができたりと，とてもいい刺激になった。

今回感じることができた刺激や，思い出した

1年生の頃の記憶を意識しながら今後も勉学に励み，立派な保育士になりたいと思う。

写真9　学部学生とのセッションの様子

写真10　ポスターセッションの様子

6. 実践し省察するコミュニティを目指して

猶原和子

(1) 聴き合う姿勢，あたたかい空間

4度目となった今回，最も感じたのは，集う参会者の方々が，「聴きあう」ことを楽しむ身体になっていることだった。そこには，これまで関わってこられた福井大学教職大学院の先生方の姿勢も大きく影響しているように思われる。

当日配布された資料の中では，ラウンドテーブルの4重の意味として，次の4つが挙げられている。[1]

1）教職大学院Newsletter No. 94, p10, 福井大学教職大学院 2017. 2. 17発行

Ⅰ　長い実践の展開をともに跡づけ，省察する。
Ⅱ　個々の実践コミュニティを超えて，実践の展開を探り，照らし合う。
Ⅲ　実践と実践，分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Ⅳ　省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

900名を超える会であり，盛りだくさんの内容で時間が気になるところだが，どこか運営もおっとりとしていて，安心して互いの話を聴こうという気持ちになる。それは，おそらく上記の考えを，運営スタッフが共有できているからなのだろうと感じた。

(2) 学部段階の教員養成を考える

このセッションでは，組織も規模も，方針も異なる大学の教師が集り，互いの悩みも語りながら，教師として何を大切にしていきたいのかを話し合った。そこで浮かんでてきたキーワードを他のグループと交流したところ，学びあうコミュニティを生み出そうとする夢を持つ教師の「佇まい」に関わるものと，国や大学の要求に答えるべき，「見えやすく標準化した組織づくり」に関わるものが現われた。一人ではなかなか自覚できないところに気づかされた。

(3) ポスターセッションからの学び

多くのポスターの中で，私が興味を惹かれたのは，中部大学1年生の「あつまれわんぱく隊」という活動であった。学部の1年生115名が関わり，年7回，幼児や小学生，困難を抱える子

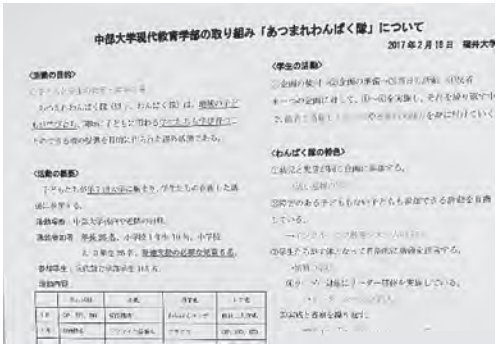


写真11　中部大学のポスター

どもと活動する取り組みで，学生の自主運営や地域との連携など，私が構想していることにつながるものであった。

発表を聴く中で，組織学習システムを確立していくと，逆に動きにくさや意欲の低下が見えてくることを感じた。指導者である三品先生自身も，著書の中で「相互作用として，協同的ではなく，もしかすると非協同的なすべを学んでしまっているかもしれない。それは組織のコミュニケーション　パターンによって学生の振る舞いが規定される面があるからである。」（三品，2017）と述べている。

学生全員に経験させたいという教師の願いと，見通しをもって7回の計画を立て，打ち上げ花火的でなく，子どもたちの学びを深める活動をつくっていく困難さは，まさに私事のように受け止めることができた。私は，まだ運営を学生に委ねておらず，焦りを感じていたのだが，もう少し多方面から考えて組織化を目指す必要があると考え直した。

(4) ラウンドテーブルでの聴きあいから

今回はテーブルが91にも及ぶほど参加者が集り，熱心なセッションが続いた。

私のグループでは，まず，特別支援教育の免許を誰一人持っていない中学校で，一般クラスの中にいる学習に課題を抱えている子の研究に取り組んだ研究事例が報告された。

生徒が特別視されないようにと気を遣うあまりに，座席の配慮や配布物に神経を使い，簡単な語彙にもルビを振って遠因に配ったという事例は，平等をどのように捉えるのかを改めて考える機会になった。真面目に取り組む教師ほど這いまわってしまい，気づかないまま，「やってあげる教師の自己満足」に陥ってしまう。「板書をこうする」ではなく，「弱い立場の子どもを一人ひとりよくみようとする教師のまなざし，居方」が大切なのではという声も挙がった。

もう一つは，学部からストレートで教職大学院に入学した学生が，週2回中学校で理科の授業を担当する中で，様々な指導方法に出会い，試しながら「ともに考え行動する子の育成を目指す」取り組みを聴いた。

一見結果が見えやすい形の指導法や生徒が目を輝かせて「楽しんでいるようにみえる」やり方に飛びついた中で，ふと，これでいいのかと考え始める過程を，そこに集った皆が，自分の学びの履歴と重ね合わせながら，うなづきながら聴いた。

また，私自身は，前任校で取り組んできた，「協働して学ぶ省察のサイクルで見えてきた教師の変容」を中心に，現在の職場で感じている課題，学生とともに創っていきたい活動などについて語った。

授業研究のあり方については，10年以上前任校で研究を重ね，発表してきたのだが，全国でみるとまだまだ「省察する」ことを重視した授業研究は少ないのだということを実感したし，「教師の意識変容」の難しさも語り合われた。

前回，この会で講演されたアンディ・ハーグリーブスは，著書の中で，「画策された同僚性」に警鐘を鳴らしている。

「画策された同僚性は，協働を促進し，支援する構造と期待のための足場にとどまらず，協働を強制し，仕事を細分化し，教師たちに裁量権を与えない管理手法の監獄である」（ハーグリーブス，2015）という指摘は，現在の日本の公立の小中学校ばかりでなく，大学にもあてはまるのではないかと，今回改めて感じた。

7. おわりに

今回のラウンドテーブルは，参加者一人ひとりに大きな出会いと発見をもたらした。このような機会を与えてくださった，福井大学の濱口由美先生に心より感謝する。

江戸川大学のこどもコミュニケーション学科は，こじんまりとしてまとまりやすいというよさがある反面，同質性を求めていきやすくなるという危険もはらんでいる。今回のように，異なる地域で異なる専門の学生たちが集うことの意味は大きいと感じた。

今後も異なる立場の人々と交流し学びあう機会を設定し，学生の思考が広がり深まる環境を考えていきたい。

引用写真

掲載した写真は，福井ラウンドテーブル2017 Spring sessionsに出展されたものである。

福井大学　探求ネットワーク
福井大学　教職大学院
福井市　さくら認定こども園
福井市　清水東公民館
福井市　一乗公民館
越前市　花筐公民館
福井市　丸山公民館
中部大学
滋賀県愛荘町立奏荘幼稚園
第47回関東甲信越静公民館研究大会八部科資料

参考文献

ドナルド・ショーン／柳沢昌一・三輪建二監訳（2007）『省察的実践とは何か』，鳳書房
アンディ・ハーグリーブス／木村優，秋田喜代美ほか監訳（2015）『知識社会の学校と教師』，金子書房
三品陽平（2017）『省察的実践は教育組織を変革するか』，ミネルヴァ書房